

| | |
|--------------|---|
| Title | 声と時間と弁証法 : 記憶と想像力の政治経済学批判序説〈5〉 |
| Author(s) | 野尻, 英一 |
| Citation | 大阪大学大学院人間科学研究科紀要. 2025, 51, p. 145-167 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/100822 |
| rights | |
| Note | |

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

声と時間と弁証法

—記憶と想像力の政治経済学批判序説〈5〉—

野尻 英一

目 次

五. 声と時間と弁証法

声と時間と弁証法

—記憶と想像力の政治経済学批判序説〈5〉¹⁾—

野尻 英一

五. 声と時間と弁証法

カントも構想力を想起の能力（再生産的構想力）としてだけではなく、認識においては感性と悟性とを結びつける超越論的図式を生み出す能力、芸術活動においては美的対象を産出する能力（生産的構想力）であると考えていた。ところでカントが構想力について述べるときに挙げる事例は直線、三角形、円など図像的、視覚的なものが多い。いわば空間的であるとも言えよう。この空間的認知が認識として取りまとめられるためには、空間を空間として把握するための否定性が必要となってくる。だからこそ空間の他者としての、空間的認知が折り重なり一つの認識を形成する〈場〉としての、時間が必要となってくる。カントにおいて（またハイデガーにおいて）構想力が時間性そのものであると考えられる理由は、ここにある。だが先に論じたように、構想力を時間性そのものであると言ってしまっただけでは、時間性の成立そのものが問えないことになる。その場合には、視覚的像が、あらかじめ与えられた継起的な枠組みであるところの時間性にはめ込まれるだけである。一方ヘーゲルの場合には、構想力の作用を今日で言うところの言語行為（speech-act）に結びつけようとしているように思われる。「知性は直接に、そして無条件に、話をすることによって表現される」[Hegel (Enz-III) 277. 邦訳三七九]。ヘーゲルにおいては、世界の図像的認識から言語的認識へと移行することが知性への移行なのだと考えられている。それゆえに「記号」を作り出す構想力というものが考えられている。「記号」において知性による事象の把握は、感性から離れて、概念としての抽象性へと移行する。先に記憶のうちに生きることが精神であるというヘーゲルの言葉を引用したが、この場合の記憶とは、直接的な経験の偶然的再生ではなく、言語によって統合された再生だとも言える。ただ図像的想起のうちに生きるのではなく言語行為のうちに生きること、空間的・視覚的認識を言語化することが、一般的知性として生きることだとヘーゲルは考えている（このことはヘーゲルが芸術論において、具象的な視覚芸術よりも抽象的な言語芸術を高く評価することと結びついている）。

ヘーゲルにおいては人間が言語空間のうちに住まうことこそが、精神として生きることである。そして生を言語化することと時間性とを結びつけて考えているところが、ヘーゲルの構想力論の注目すべき点である。「直観は直接的なものとしては、さしあた

り、或る与えられたもの・或る空間的なものである。〔しかし〕直観は或る記号として用いられる限り、もっぱら止揚された直観として存在するという本質的な規定を獲得する。知性は直観のこの否定性である。それで、記号は直観のいっそう真実な形態なのであるが、この形態は時間のなかの現存在、存在すると同時に消滅する現存在である」[Ibid. 271. 邦訳三七二]。言語行為には、時間性の発生を促すエレメントがある。そのエレメントとは何であろうか。デリダは、それを「声」に求めている。ヘーゲルはすぐに続けてこう言う。「そして記号は、そのいっそう進んだ外面的心理的規定性の方から見れば、知性自身の（人間学的）自然性のなかから出て来る存在が知性によって措定されたものである。これが音（Ton）であり、自己を公示する内面性の外化が充実されたものである。一定の表象に適合するように自己をさらに分節する音すなわち話（Rede）と、その体系すなわち言語（Sprache）とは、諸感覚・諸直観・諸表象に対して、第二の現存在、それらのものの直接の現存在よりはいっそう高次の現存在、一般に表象界において認められている現実存在を与える」[Ibid. 271. 邦訳三七二]。

このように述べたうえで、ヘーゲルは、世界の言語についての知見を引きつつ、音標言語（話し言葉）と書写言語（書き言葉）との関係について論じる。ヨーロッパの言語は書写言語に音標言語を記号化した字母書法を用い、中国では書写言語に象形文字書法を用いる。字母書法というのは、要するに読みの音と書きの表記が一致した言語である。ヨーロッパの言語では、おおむね文字の表記はそのまま発音される音を表している。これは音に忠実な表記であることによって、もともとの言葉の意味の源泉である感性的な事象およびそのイメージからより隔たった、抽象度の高い表現となっている。これに比べて中国を中心とした文化圏では主に象形文字書法が用いられており、これはもともとの感性的な意味を絵画的記号で表した名残をより多く残存させた書記法である。そこにおいては文字が直接に具体的感性的な意味を表す。この両者を比較すると、字母書法のほうが記号化の度合いが高い、つまり知性度が高いとヘーゲルは言う。「象形文字書法は諸表象を空間的図形によって記号化し、字母書法はそれに反しそれ自身すでに記号である音によって記号化する。それ故に字母書法は記号の記号から成立している」[Ibid. 273. 邦訳三七四]。「字母書法は即自的かつ対自的により知的である」[Ibid. 274. 邦訳三七六]。

漢字文化圏に生存していて、しかも音標言語を表記する書記言語を中国から輸入した日本の場合には事情が複雑なところがあり、むしろ表記そのものの持っていた意味とは異なる音声的な読みをあえてそこに与えることで意味を重ねたり、また表記と読みを切り離すことで、ヘーゲルの言うようなより高度に知性的な「言葉（Sprache）」の交換を行うことができるようにも思う。しかしヘーゲルにおける字母書法と象形文字書法の比較についての論が今日の言語学的観点からどれだけ正しいかどうかという問題は脇において、彼の言おうとしていることがどこにあるのかを見極めることが大切である。ヘーゲルによれば、ライプニッツはかつて中国の象形文字書法に刺激を受け、完全な書写言

語を開発することによって、普遍言語を生み出そうと考えた。つまり一つの記号が一つの事象を完全に表現する単位となっているような言語である。モデルは数や化学元素記号等である。そういう言語を作れば、諸民族間の、特に学問的な交流の効率と発展にもたらず効果が大きいとライプニッツは考えた。しかしヘーゲルは、その考え方はまちがいであったと断じる。諸民族間の交通はむしろ字母書法の必要と発展とをもたらしたのである。フェニキアでかつて起こったことがそれである。ヨーロッパでは諸民族のときには激しい衝突を含んだ交流が古代より活発に起こり、文化的・精神的な交通が盛んであったからこそ、より抽象度の高い字母書法が発達した。この字母書法の発達によって、ヨーロッパでは音標言語の発達が進んだ。対して象形文字書法を用いる中国では音標言語の発達は未熟である。「音標言語の発達は字母書法の習慣と最も密接に関連している。音標言語はただ字母書法によってのみ自分の分節の明確性と純粹性とを獲得するのである。中国的音標言語の不完全性は熟知されている。……ヨーロッパでは正しいことには上品に話すためにはアクセントをつけないで話す (parler sans accent) ことが要求されるのであるが、中国的音標言語においては完全性はアクセントをつけないで話すことの反対物のなかに存立しているのである。中国的音標言語が象形文字的書写言語であるために、中国的音標言語には、字母書法による分節において獲得される客観的規定性が欠けている」[Ibid. 274. 邦訳三七六]。ここでヘーゲルが問題にする客観的規定性とは、つまり、その場における非言語コミュニケーション的な表現（声音、抑揚等）に依存せずに、言語表現そのものの構造的性によって伝えようとする意味が表現されている度合いのことであると思われる。つまりヘーゲルの理想とする言語とは、文脈を言語表現そのものに織り込み、言語表現の構造そのものによって〈意味〉を表現する方向に発達した言語なのである。「包括的な完成した象形文字言語というようなものは考えられない。感性的対象はもとより固定した記号をもつことができる。しかし精神的なものに関する記号に関しては、思想形成の進行や論理的発展やらが、記号の内的諸関係に関して且つそのことによって記号の本性に関して、変化した諸見解 (Ansichten) をもたらず」[Ibid. 273. 邦訳三七五]。ヘーゲルの「精神哲学」の構成は、この後「客観的精神」へと向かい、法や道徳性、市民社会、国家を論じるいわゆる社会科学の領域に入っていく。ヘーゲルはそうした高度に発達した抽象的な社会システムを背景とし、そうした関係性の中で交流する主体同士のコミュニケーションを念頭に置いて、言語を論じている。そうした今日の言い方で言うところの近代的な主体における交流、交通は、法や政治、経済等の社会関係に根ざした高度に抽象的な概念の交換に基づいたコミュニケーションとなる側面を持つだろう。ヘーゲルの言う知的に高度な精神の領域とは、そういう近代化された社会における生活形態のことであるとイメージできる。そうした高度に抽象的なコミュニケーション様式においては、一つの単語は、文脈に応じてさまざまな意味となり得る。そのとき話者に要求されるのは、単語の適切な選択と結合によって文脈を正確に織り込むことによって、単語に付随する具象性の引力がもたらず多義性を振り払って、聞き手

に正確に〈意味〉を伝えることのできる発話であろう。こうした発話空間を実現するためにヘーゲルは、カントの映像的な生産的構想力を音声的な生産的構想力へと発展させ、〈音〉の抽象性に依拠することによって、一般的知性の媒体である「記号」の産出へと結びつけようとしている。ヘーゲルの構想力の独自性は、それが音声的な構想力であり、発話行為を生み出す構想力である点に存する。しかもその場合の音声とは、その発話者個体による抑揚の付加を排し、可能な限り一般化し、標準化した響きのみをそなえた音声である。

音声による媒介がなぜ重要なのか。それは音声直観の具体性を抽象化するという意味で、否定するものだからだ。この否定性が、直観の持つそれ固有の具体性を減らし、それに知性自身の固有性を授ける。声という媒体の本質がその時間性にあることをヘーゲルは評価する。声は具体的な表象として発せられるが、それにも関わらず、消え去っていくものである。これがよいとヘーゲルは考えている。記号の真の形態は、声によって発せられる場面にあるとヘーゲルは考えている。つまり記号自体の象徴としての形象に、知性が別の意味を重ねること、voice-over すること、この重ね合せの時間のうちにおいてだけ真の記号は成立しているのだとも言える。この記号と声と時間性の連結にこそ、ヘーゲル記号論の本質がある。

ヘーゲルは、音声的な構想力が生み出す記号を用いた発話作用と時間性との関係を指摘している。「音を出すものとしての言葉は時間のなかで消滅する。このことによって時間は音を出すものとしての言葉において、自己を抽象的な否定性として——即ち単に否定的な否定性として——明示する」[Ibid. 279–280. 邦訳三八三]。この点にデリダも注目している。「ところでヘーゲルも、記号を産出する構想力と時間とのあいだに本質的な関係を認めている」[Derrida (1972) 91. 邦訳(上)一五四]。ヘーゲルは音声性を視覚性よりもその抽象度の高さにおいて評価し、それに精神的・観念的優越を認めていた。芸術学においても自然学においても、ヘーゲルは聴覚の、音の持つ否定性を強調する。聴覚の持つ高い観念性は、外部的定在でありながら消えゆく定在として内部化される定在を可能にする。ここに生じる時間的な内部性は弁証法の運動と本質的なかわりを持つ。「観念化の運動としての音、自然的外部性のアウフヘーブングとしての音、視覚的なものから聴覚的なものへの止揚としての音」[Ibid. 109. 邦訳(上)一七四]。しかし音というものが、定在でありながら消えゆく定在であることによって時間性を可能にするという論は、フッサールの時間意識についての論を想起させるものの、それだけで弁証法の発生へとつながるわけではない。デリダは「音声中心主義」という言葉で西欧における「現象」としての「形而上学空間」の成立を指し示し、批判しようとする。この場合の「形而上学」はヘーゲルの「弁証法」のことでもあると言ってよいだろう。だが〈声〉のもつ時間性と〈弁証法〉の成立との間には、もう少し補填して論じられなければならないものがある。言葉と時間との関連を言った後で、ヘーゲルがすぐに時間の抽象的な否定性に対して、具体的な否定性としての知性の働きについて述べているこ

とに注意しなくてはならない。音＝時間はまだ抽象的な否定性にすぎない。「しかし言語記号の真実な具体的否定性は知性である。なぜかといえば知性によって言語記号は外面的なものから内面的なものへと変化させられ、そしてこの変形された形態において保存されるからである。こうして言葉は思想によって活気づけられた現存在になる。この現存在はわれわれの思想にとって絶対的に必要である。われわれがわれわれの思想について知るのは、すなわちわれわれが明確な現実的思想をもつのは、ただわれわれがわれわれの思想に対象性の形式・われわれの内面性から区別されているという形式・こうして外面性の形態——そしてもとより同時に最高の内面性の刻印をおびているような外面性の形態——を与えるときだけである。そのように内面的であり外面的なものであるのはひとり分節された音すなわち言葉だけである」[Hegel (Enz-III) 280. 邦訳三八三]。ここでは内面性と外面性との交叉、内面と外面との重なり合いを「言葉」が生み出すという点こそが、重要なのである。発話された言葉は、発せられた他者の音は、その外面性を持ったまま私の中に入り込み、私の中に内面化される。内面化されてもそれは外面である。他者の言葉を内面化することによって、私は私の内面を外面化する。この後のヘーゲルの論は、いわば一般的思考機械としての社会的主体を考えているかのようである。自分の中に他者の言葉を蓄えていくこと、つまり私的で恣意的、具体的で感性的な意味を消失した言葉を蓄えていくことによって、私は公的・社会的な象徴秩序に自己を接続する²⁾。

*

けれども、再度言えば、おそらく純粋に物理的な媒体としての「声」が問題なのではない。

確かに声は、重ね合わせに適した媒体である。映像的な想起においては、心像は相互に空間的な排他性を持つから、重ね合わせが不可能である。一方、音声では重ね合わせが可能だ。映像に音声を重ねることもできるし、音声に音声を重ねることもできる。声という媒体の否定性は、重ね合わせが可能で、その水彩絵具のような透明性から来ている。この透明性が、想起を知性的な記憶へと変換する一助となる。だがヘーゲルでさえ、声の否定性はまだ抽象的な否定性であると言う。それと比べて、知性の否定性は具体的な否定性であると言う。知性の否定性は、映像が音声化されるときに否定性よりもより深い意味での否定性である。この知性がそなえる具体的な否定性とは具体的に何であるのかをヘーゲルは直接的には言明していないが、つまりそれは、記号を生み出す否定性であり、象徴に意味を上書きする力のことだと考えられる。ヘーゲルはしばしば「抽象的」という形容詞を悪い意味で用いる。それは事柄の表層的で単純な物理的特徴を捉えているにすぎないという意味で用いられる。それに対して「具体的」という形容詞は、事柄の深く本質的な精神的特徴を捉えているときに用いられる。だからヘーゲルの言う具体

的なものというのは、むしろ一般の意味とは逆に、直接的に眼に見えるようなものではない。それは逆に理解されなくてはならない。音声の否定性は、それが物理的に消えていく性質の媒体であるからという意味で時間的であり、時間的であることによって空間的な直観の心像に対する否定性となっていた。だがさらにそうした単なる物理的な性質ではない否定性というものが考えられている。それは先に見た象形文字書法と字母書法との区別において述べられていた「話」「言語」そのものの構造に文脈を織り込むかたちで、あやまたずに一般的な意味を「記号」に載せて発することを可能にする力のことであると考えられる。それは精神的な否定性である点で、声よりもいっそう透明な否定性なのだ。

*

発達心理学者のやまだようこは、人間が言語を獲得するプロセスにおける共鳴的・共感的な関係性の存在を強調する [やまだ (二〇一〇)]。そこでは親が子どもにもものを指さし、その名を唱え、それを子どもが復唱するプロセスによる、言語の自己化が鍵である。言葉は「主体が客体と対立的に立つのではなく、自分が見たものを他者にも見せたいと願い、共鳴し、共感し、響存する、『並ぶ関係』のなかから、生まれる」。ここにおいては、音声の重ね合せによる差異と同一の同一という事態が発達論的なプロセスとして指摘されている。なおやまだが強調するように、このプロセスにおいて起こっていることは、単なる声の重なり合いではないことが認識される必要があるだろう。声という媒体が媒体として機能するには、実はそれを媒体たらしめるための、見えない媒体が必要である。この透明な媒体は、いわば欲望の共鳴である。それがなければ、他者の声はたとえ復唱されたとしても、他者の声のままである。やまだが「ことばの前のことば」というタームで説明しようとするのは、そのことである。「ことばが生まれるには、自分が見たもの、体験したものを、他者に伝えたい、分かちあいたいという強力な欲求と、それを支える人間関係が必要である」 [同一九一]。それがあってこそ、他者の声の響きを自己の声に変換し、内化するということが起こる。少なくとも定型発達の在り方においては、ということだけでも。

*

ヘーゲルの言う知性の持つ否定性と記憶の形成について、一つの示唆的なエピソードが一九四四年に、ボルヘスによって書かれている。彼の『伝奇集』に収録された「記憶の人フネス」という作品だ。このわずか数頁の短編は、ある事故がきっかけで異常な記憶能力を持つようになった人物との出会いを、簡潔だが強い印象を与えるかたちで描写している。もちろんこれはボルヘスの〈創作〉であるけれども、ボルヘスの描写は記憶

の問題についての鮮やかな洞察を含み、他の『伝奇集』に収録された諸作品と同様に、読者を人間存在についての思索へと誘う。これは一種の哲学小説と呼んでもよい。この作品で描かれる「フネス」という人物は、今日の視点からすると、ASD（自閉症スペクトラム障害）に典型的な複数の特徴を示しており、ボルヘスは何らかの機会に、ASD者と接触する機会があった可能性を思わせる。仮にそうではなく、「フネス」が完全にボルヘスの想像の産物なのだとしたら、その人間の記憶能力の特性についての洞察には驚く以外にない。

フネスという若者は、あるとき農場で荒馬に振り落とされて不随の体となり、寝たきりの生活となった。落馬の衝撃から回復したとき、彼は完全な記憶力を有するようになっていた。完全な記憶とは、この場合、これまでに眼にしたもの、いま眼にしているものすべてをあらゆる細部にわたって思い出すことができるということである。「落馬のさい意識を失った。それを回復したとき、現在はあまりにも豊饒かつ鮮明にすぎて、ほとんど耐えがたかった。もっとも古く、もっとも小さな記憶でさえもがそのとおりだった。……いまでは彼の知覚と記憶は絶対に間違いのないものになっていた」[ボルヘス（一九九三）一五五]。こうして彼は起きているときに経験するあらゆる直観、寝ているときに見るあらゆる夢、この双方の正確無比な心像たちを無限に完璧に所蔵する貯蔵庫となった。たとえば彼は、何年何月何日何時のある瞬間に見た、空の雲のかたちを精密に思い出すことができる。「実際、フネスは、あらゆる森の、あらゆる木の、あらゆる葉を記憶しているばかりか、それを知覚したか想像した場合のひとつひとつを記憶していた」[同一五八]。私たちの記憶とは、フネスと比較すれば、粗雑に抽象化された形式であることがわかる。しかしヘーゲルの用語を用いれば、フネスとは、想起の人であって、記憶の人ではないことになる。あるときフネスは独創的な計数法を思いついて、あらゆる数字に単語を記号として割り振ることを始めた。また逆に、過去のあらゆる記憶に数字を割り振って固定しようとした。「数の自然的系列にたいする無限の語彙と、記憶のイメージのすべてをふくむ無益な意識のカatalog」[同一五八]、すべてを記憶しているフネスにはそのいずれも可能だったが、ただその作業は終わるときがないことに気づいて、彼はその実行を思いとどまった。フネスは、私たちが通常の意味で用いる「概念」というものを持つことができなかつた。あらゆる直観の細部を記憶し、想起することのできるフネスは、概念を持つ必要がなかつたし、持つこともできなかつた。「フネスは、普遍的なプラトンの観念を持つことはおよそできない男であった。包括的な『犬』という記号が、さまざまな大きさや形をした多くのことなる個体をふくむということが理解しがたいだけではない。三時十四分の（横から眺めた）犬が、三時十五分の（前から眺めた）犬と同一の名前を持つことが気になったのだ」[同一五八—五九]。彼は苦もなく、多数の外国語をマスターすることができた。ラテン語の辞書とプリニウスの『博物誌』一冊を借り受けただけで数日でラテン語を習得し、『博物誌』を暗唱して、語り手である「私」を驚かせる。しかしそれほどの能力にもかかわらず、一日中暗い部屋の中に座り、

想起の充満した海に漂うフネスに、「私」は知性を感じなかった。「彼には大して思考の能力はなかったように思う。考えるということは、さまざまな相違を忘れること、一般化すること、抽象化することである。フネスのいわばすし詰めの世界には、およそ直截的な細部しか存在しなかった」[同一六〇]。

私たちは「思考するとは忘れることだ」というこのボルヘスの直感に、ヘーゲルの「知性」についての考え方との驚くべき一致を見出すことができる。ヘーゲルの考えでは、想起は記憶ではない。記憶とは、直接的な心像を葬り去ることによって成立する。そして記憶こそが知性であり、したがって、思考するとは忘れることである。「記憶とは忘れることである」という逆説が、ここに成立する。それがヘーゲルの言ったことだ。私たちはすべてを覚えていることはできない。それは哀しいことだ。しかし忘れることによって、私たちはそれについて考えることができるし、語ることもできる。そしてそのように意識することすらせずに私たちは、忘却において思考し、語っている。

*

村上春樹の小説『ノルウェイの森』の冒頭で、主人公である「僕」は、昔の恋人「直子」との間に起きた出来事のこまやかなひとつひとつを時が経つにつれて思いだせなくなっていることを哀しむ。プルースト流儀の始まり方をするこの物語では、紅茶に浸したマドレーヌの味ではなく、恋人の死の十七年後に「僕」が航空機の中で耳にするビートルズの Norwegian Wood の旋律をトリガーとして、記憶の流れが起動する。その死んだ恋人は、私のことをいつまでも忘れないで、と言ったのである。だが刻一刻と薄らいでいく不完全な記憶のなかにあるいまこそ「僕」は、「直子」のことを書き留めることができ、より深く彼女を理解できるようになった、と感じる。「もっと昔、僕がまだ若く、その記憶がずっと鮮明だったころ、僕は直子について書いてみようと思いましたが何度かある。でもそのときは一行たりとも書くことができなかった。その最初の一行さえ出てくれば、あとは何もかもすらすらと書いてしまえるだろうということはよくわかっていたのだけれど、その一行がどうしても出てこなかったのだ。全てがあまりにもくっきりとしすぎていて、どこから手をつければいいのかわからなかったのだ。あまりにも克明な地図が、克明にすぎて時として役に立たないのと同じことだ」[村上(二〇〇四)(上)二二]。忘却が「僕」を十七年間にわたる失語から救いだし、「直子」についての物語を始めることを促すのだ。

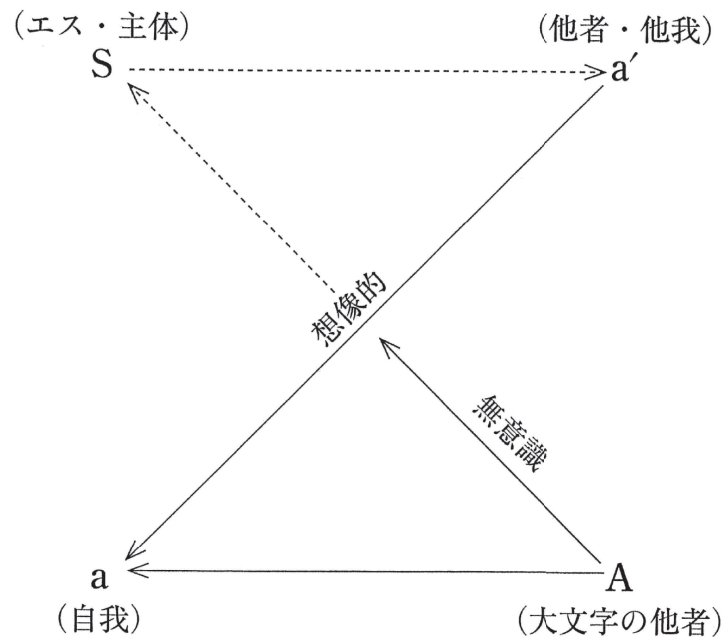
*

ボルヘスの「〈すべて〉を想起することのできる人」という現実離れしたフィクショナルな人物像を経由することで、私たちは私たちの「記憶」のもつ忘却的な性質に、初

めて思い当たることができる。暗闇に座り、ひたすら豊饒で緻密な想起について語ることしかできないフネスは、「私」の言葉をほとんど理解しようとしなない。一方で彼は、非常に丁寧な文面の手紙を書き、「私」に送り、ラテン語の辞書と書物を借り受ける。彼は言語を習得することはできるし、上手な文章を書くことはできる。話すこともできる。しかし「私」とフネスとの〈対話〉には困難が伴う。フネスの想起の充満には、私の言葉の差し込む余地は存在しない。フネスのつぶやきには、私の〈声〉が浸透しないのである。思考することと対話することは、ある意味では同じだ。そのいずれも、細部を捨象し、一般化し、抽象化することを必要とする。フネスを想起の充満する暗闇から救い出す光とは、この抽象化を可能とする透明な否定性の力だ。フネスに必要なのは、想起を記憶へと変化させる否定性である。それはまた記号を作る構想力でもある。この構想力の持つ否定性が差し込むとき、フネスは思考し、他者と対話することができるようになるだろう。フネスは確かに語っている。しかしそれは「私」に向けた言葉ではないし、また「私」の言葉もフネスには入っていない。フネスは対話という意味での〈言葉〉を失った存在なのだ。

あるいは、フネスにおいては、他者の〈声〉はあまりにそのままに入ってきてしまうことが問題なのかも知れない。自分の〈声〉で他者の〈声〉をヴォイスオーバーすることができないために、フネスは想起のすし詰めに閉じ込められ、そこに否定性の隙間を入れることができない。そうすると、重要なことは、〈声〉あるいは声に託されて侵入する透明な否定性の〈重なり合い〉もしくは〈交叉〉であることになる。逆に言えば、私たちは実は、他者の声を聞いているようで聞いていない。他者の声にヴォイスオーバーして、自己の声を聞いているのである。あるいは、大文字の他者、大文字の〈人間〉の声を聞いている。初期ラカンの「シェーマL(L図)」を思い浮かべてみよう。眼前の〈他我〉の声に応答する〈自我〉のラインを遮って、〈大文字の他者〉からの声を聞くラインを確立するとき、私たちの〈主体〉は成立する。この図式のもっとも巧みな点は、この構造が二つのラインの交叉によって成り立っているということ、そして単にラインの交叉なのではなく、ねじれた四辺形として、ひと回りぐるっと回ることでできる閉じた回路となっているということだ。この図は平面図だから交叉となるが、これを立体に変換すると、クラインの壺のような構造となり、弁証法の循環回路が表現できるだろう。ラカンは〈大文字の他者〉からの声を聞く象徴界のラインが、自我＝他我の想像界のラインに遮られ乱されるときに精神病（統合失調症）に陥ると考える。弁証法回路の失調である。だがフネスの場合には、おそらくこの二つのラインが交叉していない。それは回路成立のうえでの失調なのではなく、そもそも回路の不成立なのだ。

ここまで考えて、もしかしたらフネスは、遅れているのではなく、私たちに先んじた存在であるのかも知れないとも思う。ボルヘスはすでに、フネスこそはニーチェの言うあの「超人」(Übermensch)の先駆的な存在なのだと言っていた。



*

二十世紀の後半、一九七〇年代以降における現代思想（ポスト構造主義／ポストモダン思想）と呼ばれる思想潮流は、ラカンの精神病理学が取り組んだ神経症と分裂症（統合失調症）の鑑別診断〔参照：松本（二〇一五）〕の試みから、「パラノイア」と「スキゾフレニア」という二つの人間精神の類型〔参照：浅田（一九八三）など〕を取り出し、前者を資本主義経済を駆動する労働力としての近代的精神の類型、後者をその開平によって資本主義経済による人間精神の労働力化を乗り越えていくポスト近代的精神の類型と位置づけた。このように整理しておこう。本論考の観点から前者を「差異と同一の同一」という弁証法回路の成立、後者を弁証法回路の開平による超克と対応づけることができる。ドゥルーズ／ガタリの「資本主義と分裂症」というプロブレマティークは、このようにして分裂症的精神類型を、資本主義的な神経症的精神類型を超克するものとして位置づけるものだった。ところが、その後の先進国における後期資本主義経済のハイパー消費経済化、バブル経済の周期的発生、金融経済化、グローバル化の経験を経て二十一世紀に突入した今日明らかとなってきたのは、ポスト近代的とされた統合失調症様精神モデルは、高度資本主義社会における商品の充溢に対応した自我のありようにすぎなかったということだ。資本主義的生産様式においては経済の回転につれて不変資本が蓄積されることにより、可変資本（人間労働力）と不変資本（設備・技術・知識・原料）との比率が高度化する。生産の現場における直接的で単純な人間労働の本質的な不必要性の度合いが高まる。生産物の輸出や生産現場そのものの輸出などのファクターを省いて単純化して言えば、生産資本の蓄積が十分になされた社会においては、高度化された

少数の労働力のみが必要となりつつも、生み出される商品の消費は必要であるから、商品は高度化の一途を辿る。技術革新に資本が投下され、日常はテクノロジーを駆使した高度な商品によって満たされていく。資本蓄積が一定の水準以上となった日本のような社会では、こうして、比較的単純な労働に従事する社会層でも、以前には考えられなかったような高度な技術を駆使した商品によって日常を彩った生活を送ることができるようになる。人並み以上の収入を望む場合は、自分の労働力そのものを知識的・技術的に高度化して労働市場に参入し、高度労働者となるか資本家となるかのいずれかである。こうして生活形態は二極化の傾向をたどるが、いずれの生活にしても、不変資本を可変資本で、具体的労働を抽象的労働で、使用価値を交換価値で上書きし、ヴォイスオーバーすることで剰余価値を生みだし技術を高度化する亢進プロセスは、途切れることなく維持され、私たちの生活はついに労働からの解放、つまり時間的な豊かさを獲得することができない。剰余価値の生産は、絶え間ない技術革新と資源の消費を要求し、それは環境を圧迫する。その犠牲の上に先進国では、蓄積された資本を生産システムとして海外拠点へと移し、現地の安い労働力との組み合わせで資本の有機的構成をリセットして再編成するから、直接的な生産から解放されたかのような生活が高度な資本蓄積を有する都市人口など一部の層では可能だろう。だけれどもそれで人間労働を交換価値によって抽象化するサイクルを超克できたわけではない。高度な商品に満たされた生活を得るためにみずからの労働力を高度に商品化することを余儀なくされる仕組みは、マルクスの時代から驚くほど変わっていない。蓄積された資本が労働の解放に用いられることは、ついにない [参照：Nojiri (2014)]。

〈商品空間〉に閉鎖される呪縛を生み出しているのは、私たち自身だ。私たちは〈商品〉を生産し消費する快樂のサイクルをやめることができない。それは〈商品〉が〈記号〉だからだ。かつて現代思想ブームの時に〈記号〉とは差異の戯れであるなどと言われたが、〈記号〉とはそのようなものではない。差異の戯れなどという表層的な観念操作にそれほど呪縛的な快樂などありはしない。それは知識人の誤解だ。〈記号〉によって私たちは、他者の声を自己の声に変換して聞く。やめることができないのは、その否定性の〈交叉〉であり、それによって生じる〈主体〉であることの快樂である。かつてマルクスは、物象化とは、ヒトとヒトとの関係がモノ化すると同時に、モノとモノとの関係がヒト化することであると言った。私たちは〈商品〉に他者の声を聞いている。と同時にそれを、自己の声として聞いている。そのことによって今度は、自己の存在に魔術を施し、他者に聞かれる声へと化身する。そうして自己を〈商品〉へと転化している。もし「超人」と呼ばれ得る存在が可能なのだとしたら、それはこの他者の声の中に自己の声を聞く〈交叉〉、ヴォイスオーバーの効果を振り切ることができるか、もしくは初めから無視することのできる人間のことだろう。統合失調症様精神モデルは、直接的人間労働の生産局面への包摂圧力が強いステージで生じる部分的な反作用のモデル化にすぎなかったと捉えることができる。だが今日明らかなのは、生産局面から離脱すれば交換

価値の支配する商品空間を抜け出すことができると考えるのは、まちが이었다ということである。消費の空間において、交換価値という〈声〉の支配は継続する。統合失調症の危機は回避できても、生産の神経症=弁証法という名のパラノイアは、消費の神経症=弁証法という名のパラノイアに姿を変えて、存続する。統合失調症は一九七〇年代以降、先進国では軽症化傾向にあることが報告されている。資本主義経済のこのステージにおいて、相対的にASD（自閉症）への注目が集まるのは、偶然ではない。ASDが現代において浮上する事実は、統合失調症ではなくASDこそが、神経症の反対概念であったことを示唆している。商品空間の声の充満のさなかにあつて、その声を聞かないこととしての自閉症概念。すなわち「資本主義と自閉症」というプロブレマティーク。

*

内面性と外面性との交叉、それがどうして弁証法を生み、時間性を生むのか、私たちはいまだこの問いに答えていない。しかしヘーゲルの記号論から得られた重要な示唆は、ヘーゲルが構想力を「記号」を生み出す構想力として捉えたこと、そのことによって構想力の働きが言葉（発話）と結びつけられたことである。いまだその精密な機序は明らかではないが、音声や言葉（発話）のもつ否定性と時間性との関係が示唆された。同時にそこには、弁証法発生契機が、そして西欧形而上学の空間の成立機序が、かかわっている。構想力と言葉と時間性と弁証法、そして形而上学。デリダはかつてこれらのかわりをテーゼとして示唆したが、論証を完成させたわけではない。しかし彼は大きな示唆を残している。

デリダは『哲学の余白』（一九七二年）において、ヘーゲルの記号論と空白の神話を生み出す形而上学という二つの重要なプロブレマティークを提出している。前者は「豎坑とピラミッド」、後者は「白い神話」という論文で論じられている。前者では、ヘーゲルにおける記号を作る想像力こそが弁証法を生み出し、時間を生み出すことが述べられる。後者では、あらゆる概念とは比喩であると言われ、西洋の形而上学とは基本的に隠喩であるところの神話を越えたメタ神話、神話についての神話、空白の神話を生み出すことがその本質であることが述べられる。しかしこの重要な二つの問題提起は、デリダにおいてはきれいに接続されたかたちでは解かれてはいない。理由のひとつは、デリダがその隠喩論において、「隠喩」と「換喩」を明確に区別した論立てをしなかったことにあると思われる。叙述の端々や注においてデリダは、「換喩」の問題にかすかに触れるものの、その論点に焦点を当てることには踏み込まなかった³⁾。デリダが論じたのは、大きな意味での比喩表現一般としての隠喩（メタファー）であり、それと西洋形而上学の本質との問題であった。デリダは「白い神話」において、哲学の用いるすべての「概念」とは隠喩にすぎないと主張する。それは、もともとは感性的な意味を持っていたのだが、それが使い古されるうちに摩滅せられ、もともとの起源とは異なった意味を

担って流通するようになったトークンなのだ。「抽象的な観念はつねになんらかの感性的な比喩を隠している。形而上学の言語の歴史は比喩の効力の消去および比喩の肖像の摩滅と一体であろう」[Derrida (1972) 250. 邦訳 (下) 八六]。そして形而上学としての哲学とは、この起源の感性的刻印の摩滅と忘却とを取り戻そうとして、表現の彼方に唯一の真理を仮構するようになってしまった態度のことである。「[アナトール・フランス『エピクロスの園』より引用]『すなわち何か抽象的な観念の一切の表現は一個の寓意でしかありえないということだ。仮象の世界を免れていると信じているあの形而上学者たちは奇妙な運命のめぐり合わせによって、永遠に寓意のなかで生きることを強制されているのだ。悲しい詩人である彼らは古代の寓話を色褪せさせたが、しかし彼らはそうした寓話の組み立て工にすぎないのだ。彼らは白い神話を作っているのだ。』。……形而上学——それは西洋の文化を結集し、反映=反省する白い神話である。すなわち白人は自分自身の〔=自己固有の〕神話を、インド=ヨーロッパの神話を、そのロゴスすなわちみずからの固有語のミュトス〔神話〕を、彼がいまだに〈理性〉と呼びたがっているに違いないものの普遍的形式と取り違えているのだ。……白い神話——形而上学はそれを生み出した神話的舞台を自分自身のなかで消去したが、にもかかわらずこの舞台は活発に蠢いており、パランプセストのなかに白いインクで、不可視の覆い隠された粗描として書き込まれたままである」[Ibid. 253-54. 邦訳 (下) 九二-九三]。

そこでデリダはニーチェを引用する。「では真理とは何か。それは多数の遊動する隠喩、換喩、擬人法であり、要するに詩的・修辭的に高められ、置換され、飾られた人間的諸関係の総和である。それが長い慣用を経て、或る民族にとって堅固で規範的・拘束的と思われるようになったのである。すなわち真理のかずかずとは、それが幻想であることを忘れられてしまった幻想、使い古されてその感性的な力を失った (*die abgenutzt und sinnlich kraftlos geworden sind*) 隠喩、その刻印 (Bild [形像]) を失って、以後貨幣としてではなく金属として重宝されるようになった貨幣のことなのである」[Ibid. 258. 邦訳 (下) 九六-九七]。ここでデリダが、ヘーゲルの構想力論と記号論を意識しつつ、感性的な力や Bild の喪失というニーチェの表現を引用していることは明らかだろう。またデリダは、ニーチェの洞察と価値論 (マルクス) との重なりも示唆している。すなわち使用価値の交換価値による上書きである。形而上学とは、神話が比喩であることを忘れ、唯一の神話、最後の神話、神話そのものに到達しようとする態度のことである。神話みずからが自己が一つの比喩であることを忘れて、神話作用そのものを対象化するとき、その神話は空白の神話となる。対象化された神話、それが「白い神話 (mythologie blanche)」の意味である。ここに自己の出自についての記憶喪失に見舞われながら自己の意味について問う神話/自己が誕生する。デリダは、デュ・マルセが隠喩の定義に「光」を用いることに注目する。「精神の光と言うとき、この光という語は隠喩として捉えられている。というのも固有の意味での光が物体をわれわれに見えるようにしてくれるように、認識し看守する能力は精神を照らしてくれるからであり、健康な判断ができる状

態に精神をおいてくれるからである。したがって隠喩は一種の〈転義〉である。隠喩で用いられている語は固有の意味〔＝本義〕とは別の意味で捉えられている。すなわち或る古代の人が言うように、隠喩で用いられている語はいわば**借家のなかにある**のだ。これはあらゆる〈転義〉に共通の本質的なことである」[Ibid. 302. 邦訳（下）一四七。デリダによるデュ・マルセからの引用]。ここでデュ・マルセが隠喩の定義をするのに隠喩を用いていることは明らかだが、ここで「光」の比喩が用いられていること、また「借家」の比喩が用いられていることが、デリダにとっては重要である。この光は、われわれが感性によって物を見るときに物を照らし出す自然の光とは別の種類の光、つまり精神の光である。それは理性（ヌース）の光である。私たちは実は物を見るときに、自然の光に理性の光を上書きして見ている。ヘーゲルも想起においては感性の光が心像を暗闇から呼び出すと言っていた。だが想起が記憶となる時、記憶を呼び出す光はヌースの光であることになるだろう。つまりそれこそが、想起を構想力へと変換する光なのだ。そのヌースの光とはいったい何なのだろうか。ここでのデリダの論考はそこまでは明らかにしていない。もう一つ、デリダが着目していたのは、デュ・マルセが用いた隠喩についての「借家」の比喩である。「借家という比喩は、隠喩**そのもの**を意味するためにある。それは隠喩の隠喩なのだ。すなわち借家という隠喩は所有権の剥奪〔＝脱固有化〕、〈自宅の外に在ること〉を指すが、しかしなおも或る住処〔＝滞留〕のなか^に在ること、自宅の外に在りながらも自宅のなか^に在ることを指している。そうした在り方において、ひとは自己を再び見だし、自己を認識＝再認し、自己を結集させたり自己に似たりする。それは要するに自己から自己へと出ることなのだ。この隠喩は再自己固有化における（あるいは再自己固有化を目指した）迂回としての哲学的隠喩なのであって、この場合、再自己固有化とは、観念〔＝イデア〕がみずからの光の中で再臨すること、自己に現前することなのである。プラトンのエイドスからヘーゲルの〈理念〉に至る隠喩の行程である」[Ibid. 302. 邦訳（下）一四八]。

借家という比喩においては、自己の外にありながら自己であるという重ね合わせが表現されている。それを可能にするのが、上書きする理性の光である。この光はどこからやってくるのか。それこそがおそらくあのフネスを、望むと望まざるとにかかわらず、想起の充満から連れ出し、記憶と対話の世界へと連れ出す光なのだ。われわれはこの光の正体を見きわめるために、二十世紀言語論の基礎の一つとなった、ヤーコブソンにおける「隠喩」と「換喩」との対比を基とした失語症論を、再びデリダを導入としつつ参照することとしよう。その結果、明らかとなるのは、この「光」は「換喩」を生成する能力であるということだ。

（〈6〉へ続く）

注

- 1) 本稿は一般書籍『哲学の戦場』(那須政玄・野尻英一編、行人社、二〇一八年)所収の「未来の記憶——哲学の起源とヘーゲルの構想力についての断章」に加筆修正し、学術紀要掲載用にシリーズのかたちで再構成したものである。
- 2) このヘーゲルの機械的知性についての論は、江戸時代の武家や寺子屋の教育における漢文素読を想起させる。漢文の素読は、まずはその意味を考えずに、ただ機械的に暗唱することが基本であったという。このように近世日本においては、もともとは中国語である『論語』など他者の言葉を、日本語の音声に変換し、暗唱によって内面化すること、それこそが教養形成 (Bildung) であった。
- 3) 「白い神話」の原注 (21) を参照のこと [Derrida (1972) 271. 邦訳 (下) 二八五]。この注がついている本文でデリダは、ニーチェが一切の音声的言表を隠喩であるとまで言ったことに言及し、音声言語 (パロール) とは異質なものが音声言語によって上書きされることを隠喩の本質であると述べている。また注においては、ニーチェが隠喩という言葉で言おうとしているのは「記号の換喩」を言説のエレメント全体へと拡張することにあるのではないかと言っている。つまり、デリダが言いたいのは、形而上学の本質とは隠喩であり、隠喩とは本質的にすべて換喩であり、感性的表象に意味を上書きすることで成立する記号であるということであろう。

主要参考文献

- * 文献リストは本論考シリーズ共通のものである。
 - * 論点の上で重要なものについては原典を参照し、原典情報、邦訳文献情報の順に掲載した。邦訳のみ参照のものは邦訳文献情報を先に掲載している。筆者が翻訳を修正した場合は都度明記した。
- Arendt, Hannah *Vita activa oder vom tätigen Leben*, 17. Auflage, 2016. (ハンナ・アーレント『活動的生』森一朗訳、みすず書房、二〇一五年)
- Ballard, J.G. “Which Way to Inner Space?”, *Science Fiction Criticism: An Anthology of Essential Writings*, edited by Rob Latham, Bloomsbury Academic, 2017, pp. 101–103. (邦訳: <https://ja.wikipedia.org/wiki/J・G・バラード> [2022年9月27日アクセス])
- de Man, Paul *Aesthetic Ideology*, edited with an introduction by Andrzej Warminski, University of Minnesota Press, 1996. (ポール・ド・マン『美学イデオロギー』上野成利訳、平凡社ライブラリー、二〇一三年)
- Derrida, Jacques *Marges—de la philosophie*, Les editions de Minuit, 1972. (ジャック・デリダ『哲学の余白 (上・下)』高橋允昭ほか訳、法政大学出版局、二〇〇七・二〇〇八年)
- Hegel, G.W.F. *Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften III* [Werke 10], Suhrkamp, 1986. (Enz-III と略記) (G・W・F・ヘーゲル『精神哲学』船山信一訳、岩波書店 [改訳版・単行本]、二〇〇二年)

- Hegel, G.W.F. *Glauben und Wissen oder die Reflexionsphilosophie der Subjektivität in der Vollständigkeit ihrer Formen als Kantische, Jacobische, und Fichtesche Philosophie* (Kritisches Journal der Philosophie, Bd. II, Stück 1, Juni, 1802) [Suhrkamp, Bd. 2]. (GW と略記) (G・W・F・ヘーゲル『信仰と知』上妻精訳、岩波書店、一九九三年)
- Hegel, G.W.F. *Vorlesungen über die Ästhetik, Berlin 1820/21. Eine Nachschrift*, hrsg. von Helmut Schneider, 1995 [Hegeliana, Bd. 3]. (VA-1820 と略記) (G・W・F・ヘーゲル『美学講義』寄川条路監訳、法政大学出版局、二〇一七年。本書は一八二〇／二一年のベルリン大学で行われた最初の美学講義の講義録)
- Hegel, G.W.F. *Vorlesungen über die Ästhetik I, II, III* [Werke 13, 14, 15], Suhrkamp, 1986. (VA-I, II, III と略記) (G・W・F・ヘーゲル『美学講義 (上・中・下)』長谷川宏訳、作品社、一九九五・一九九六年)
- Hegel-Studien. Bd. 26. Nachschriften von Hegels Vorlesungen.* Hrsg. von Friedhelm Nicolin und Otto Pöggeler, Meiner, 1991. (オットー・ペゲラー編『ヘーゲル講義録研究』寄川条路監訳、法政大学出版局、二〇一五年「第6章・主観的精神の哲学講義」(ブルクハルト・トゥシュリング))
- Heidegger, Martin *Kant und das Problem der Metaphysik*, Gesamtausgabe Band 3, Klostermann, 2. Auflage, 2010. (マルティン・ハイデガー『カントと形而上学の問題』木場深定訳、理想社、一九六七年)
- Husserl, Edmund *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie, Erstes Buch, Allgemeine Einführung in die reine Phänomenologie*, Sechste Auflage, Max Niemeyer Verlag, 2002. (エドムント・フッサール『イデー I-I・II』渡辺二郎訳、みすず書房、一九七九・一九八四年)
- Jakobson, Roman/Morris, Halle *Fundamentals of Language*, Mouton & Co., Printers, 2015. (ロマン・ヤーコブソン『一般言語学』川本茂雄監修、田村すゝ子ほか共訳、みすず書房、一九七三年)
- Jameson, Fredric *The Hegel Variations*, Verso, 2010 (フレドリック・ジェイムソン『ヘーゲル変奏』青土社、二〇一一年)
- Jameson, Fredric *The Ideologies of Theory: Essays 1971-1986*, Verso, 2008 [1988]. (『のちに生まれる者へ——ポストモダニズム批判への途 1971-1986』鈴木聡ほか訳、紀伊國屋書店、一九九三年)
- Kant, Emmanuel *Anthropologie du point de une pragmatique*, précédée de Michel Foucault; *Introduction à l'Anthropologie de Kant*, Paris, Librairie philosophique J. Vrin, 2008. (ミシェル・フーコー『カントの人間学』王寺賢太訳、新潮社、二〇一〇年)
- Kant, Immanuel *Kritik der reinen Vernunft*. Nach der 1. Und 2. Original-Ausgabe hrsg. von Raymund Schmidt, 1926, Philosophische Bibliothek, Bd. 37a, Felix Meiner, 1990. (『純粹理性批判 (上・中・下) / プロレゴメナ』有福孝岳・久呉高之訳、カント全集 4・

- 5・6、岩波書店、二〇〇一・二〇〇三・二〇〇六年)
- Kant, Immanuel *Kritik der praktischen Vernunft*. (Sämtliche Werke. Herausgegeben von Karl Vorländer. Band II. Philosophische Bibliothek Bd. 38. 5. Auflage, 1906. (『実践理性批判・人倫の形而上学の基礎づけ』坂部恵・伊古田理・平田俊博訳、カント全集 7、岩波書店、二〇〇〇年)
- Kant, Immanuel *Kritik der Urteilskraft*. (Sämtliche Werke. Herausgegeben von Karl Vorländer. Band II. Philosophische Bibliothek Bd. 39. 7. Auflage, 1924. (『判断力批判 (上・下)』牧野英二訳、カント全集 8・9、岩波書店、一九九九・二〇〇〇年)
- Kant, Immanuel *Anthropologie in pragmatischer Hinsicht*. (Sämtliche Werke. Herausgegeben von Karl Vorländer. Band IV. Philosophische Bibliothek Bd. 44. 7. Auflage, 1980. (A_pH と略記) (『人間学』渋谷治美・高橋克也訳、カント全集 15、岩波書店、二〇〇三年)
- Lacan, Jacques *Le transfert (1960–1961)*, Le Séminaire, livre VIII, Édition du Seuil, 1991. (ジャック・ラカン『転移 (上・下)』小出浩之ほか訳、岩波書店、二〇一五年)
- Marx, Karl/Engels, Friedrich *Die Deutsche Ideologie [1845–1846]*, Marx-Engels Werke (MEW), 9 Auflage 1990. (マルクス／エンゲルス『ドイツ・イデオロギー』廣松渉編訳、岩波文庫、二〇〇二年)
- Nojiri, Eiichi “Negativity, History, and the Organic Composition of Capital: Toward a principle theory of transformation of subjectivity in Japan”, *Canadian Social Science*, Volume 10 (Number 4) 1–21, 2014.
- Sohn-Rethel, Alfred *Geistige und körperliche Arbeit: zur Epistemologie der abendländischen Geschichte*. Rev. u. erg. Neuaufl. Weinheim: VCH, Acta Humaniora, 1989. (アルフレート・ゾーン＝レーテル『精神労働と肉体労働』寺田光雄ほか訳、合同出版、一九七五年)
- Taylor, Charles *Hegel and Modern Society*, Cambridge University Press, 2015 [1979]. (チャールズ・テイラー『ヘーゲルと近代社会』渡辺義雄訳、岩波書店、二〇〇〇年)
- Vieweg, Klaus *Die sanfte Macht über die Bilder—Hegel Philosophische Konzeption von Einbildungskraft* (lecture at Hosei University), 2008. (クラウス・フィーバーク「像を支配する柔らかい力：構想力についてのヘーゲルの哲学的構想」赤石憲昭・野尻英一訳『理想 第六八二号』、二〇〇九年)
- Žižek, Slavoj *The Most Sublime Hysteric: Hegel with Lacan*, Cambridge, Polity Press, 2014. (スラヴォイ・ジジエク『もっとも崇高なヒステリー者——ラカンと読むヘーゲル』鈴木國文ほか訳、みすず書房、2016年)
- アウグスティヌス『告白録 (上・下)』(アウグスティヌス著作集第五卷I・II) 宮谷宣史訳、教文館、二〇〇七年(「告白」と略記、巻・章を「一〇・一七」と略記) (SANCTI AVGVSTINI CONFESSIO NV M LIBRI XIII QVOD POST MARTIN V M SKVTELLA ITERVM EDIT LVCAS VERHEIJEN O. S. A. Maître de recherche au C. N. R. S., TVRNHOLTI, TYPOGRAPHI BREPOLS EDITORES PONTIFICII, MCMLXXXI

(CORPUS CHRISTIANORVM Series Latina XXVII)

アウグスティヌス『三位一体』(アウグスティヌス著作集第二八卷) 泉治典訳、教文館、二〇〇四年(「三位一体」と略記、巻・章略記同上)(Euvres de Saint Augustin, 15–16, La Trinité, 1955)

アウグスティヌス『創世記注解(1・2)』(アウグスティヌス著作集第一六・一七卷) 片柳栄一訳、教文館、一九九四年(「創世記注解」と略記、巻・章略記同上)(Euvres de Saint Augustin, 48–49, De Genesi ad litteram, 1972)

浅田彰『構造と力——記号論を超えて』勁草書房、一九八三年

朝妻恵里子「ロマン・ヤコブソンのコミュニケーション論：言語の「転位」」『スラヴ研究 No. 56』北海道大学スラブ研究センター、一九七二—二〇〇九年

岡崎和子「記憶論の深まり」北陸大学紀要第二六号、一〇九—一二三頁、二〇〇二年

加藤尚武ほか編集『ヘーゲル辞典』弘文堂、一九九二年

クセノポン(クセノフォン)「ソクラテスの弁明」『ソクラテスの弁明・饗宴』船木英哲訳、文芸社、二〇〇六年(E.C. Marchant, *Xenophontis Opera Omnia*, Tomus 2, Oxford Classical Texts, 1921)

クセノポン(クセノフォン)「饗宴」『ソクラテスの弁明・饗宴』船木英哲訳、文芸社、二〇〇六年(E.C. Marchant, *Xenophontis Opera Omnia*, Tomus 2, Oxford Classical Texts, 1921)

クセノポン(クセノフォン)『ソクラテスの思い出』佐々木理訳、岩波文庫、一九七四年

ゴフ、ジャック・ル「中世の人間」、ジャック・ル・ゴフ編『中世の人間——ヨーロッパ人の精神構造と創造力』鎌田博夫訳、法政大学出版局、一九九九年(Sous la direction de Jacques Le Goff, *L'uomo medievale*, Giuseppe Laterza & Figli Spa, 1987)

酒井直樹『過去の声——十八世紀日本の言説における言語の地位』以文社、二〇〇二年

坂口ふみ『〈個〉の誕生——キリスト教教理をつくった人びと』岩波書店、一九九六年

清水光恵「自閉症スペクトラムにおける『私』」(第一六回河合臨床哲学シンポジウム、二〇一六年一月一日、於：東京大学弥生講堂一条ホール)

庄子大亮『アトランティス・ミステリー——プラトンは何を伝えたかったのか』PHP新書、二〇〇九年

新宮一成『ラカンの精神分析』講談社現代新書、一九九五年

『莊子・内篇』金谷治訳注、岩波文庫、一九七一年

デカルト『省察・情念論』(中公クラシックス) 井上庄七ほか訳、中央公論新社、二〇〇二年(Euvres de Descartes; publiées par Charles Adam et Paul Tannery, Tome VII, XI)

デニケン、エーリッヒ・フォン『未来の記憶』松谷健二訳、一九九七年〔再刊〕(Erich von Däniken, *Erinnerungen an die Zukunft*, Econ Verlag GmbH, 1968)

- 富松保文『アウグスティヌス〈私〉のはじまり』NHK出版、二〇〇三年
- 野尻英一『意識と生命——ヘーゲル『精神現象学』における有機体と「地」のエレメントをめぐる考察』社会評論社、二〇一〇年
- バフチン、ミハイル「ドストエフスキー論の改稿に寄せて」『ことば対話 テキスト』（ミハイル・バフチン著作集第八巻）新谷敬三郎ほか訳、新時代社、一九八八年（M.M. Бахтин, К переработке книги о Достоевском. Эстетика словесного творчества. М., Искусство, 1979, с. 308–327 [1961]）。初出事情については邦訳書解説を参照。
- 広田昌義「想像力の位置：モンテーニュからデカルトへ」『一橋大学研究年報 人文科学研究』一二号、二六七—三一九頁、一九七〇年
- プラトン「ソクラテスの弁明」『プラトン全集 1（エウテュプロン・ソクラテスの弁明・クリトン・パイドン）』今林万里子・田中美知太郎・松永雄二訳、岩波書店、一九七五年（Plato (1922a). *Apology*, J. Burnet, *Platonis Opera*, 5 vols., Oxford Classical Texts）
- プラトン「饗宴——恋について」『プラトン全集 5（饗宴・パイドロス）』鈴木照雄・藤沢令夫訳、岩波書店、一九七四年（Plato (1922d). *Symposium*, J. Burnet, *Platonis Opera*, 5 vols., Oxford Classical Texts）
- プラトン「メノン——徳について」『プラトン全集 9（ゴルギアス・メノン）』賀来彰俊・藤沢令夫訳、岩波書店、一九七四年（Plato (1922c). *Meno*, J. Burnet, *Platonis Opera*, 5 vols., Oxford Classical Texts）
- プラトン「国家——正義について」『プラトン全集 11（クレイトポン・国家）』田中美知太郎・藤沢令夫訳、岩波書店、一九七六年（Plato (1922e). *The Republic*, J. Burnet, *Platonis Opera*, 5 vols., Oxford Classical Texts）
- プラトン「ティマイオス——自然について」『プラトン全集 12（Plato (1922f). *Timaeus*, テイマイオス・クリティアス）』種山恭子・田野頭安彦訳、岩波書店、一九七五年（J. Burnet, *Platonis Opera*, 5 vols., Oxford Classical Texts）
- プラトン「クリティアス——アトランティスの物語」『プラトン全集 12（ティマイオス・クリティアス）』種山恭子・田野頭安彦訳、岩波書店、一九七五年（Plato (1922b). *Critias*, J. Burnet, *Platonis Opera*, 5 vols., Oxford Classical Texts）
- ボルヘス、J・L『伝奇集』岩波文庫、一九九三年（Jorge Luis Borges, *Ficciones*, Edit. Emecé, 1944）
- 真木悠介「交響するコミュニケーション」『気流の鳴る音』筑摩書房、一九七七年
- 正高信男「他者との交流あつての『私』」読売新聞（学びの時評）、二〇〇五年一月二一日（月）
- 松本卓也『人はみな妄想する——ジャック・ラカンと鑑別診断の思想』青土社、二〇一五年
- 三木清『構想力の論理（一九三九・一九四八年）』三木清全集第八巻、岩波書店、

一九六七年

村上春樹『ノルウェイの森（上・下）』講談社文庫、二〇〇四年

山田忠彰「ヘーゲルにおける構想力の行方——ドイツ観念論における展開を顧慮して」
『ヘーゲル哲学研究 第一七号』三六一—四九頁、二〇一一年

やまだようこ『ことばの前のことば うたうコミュニケーション』（やまだようこ著作
集第一巻）新曜社、二〇一〇年

米盛裕二『パースの記号学』勁草書房、一九八一年

レヴィナス、エマニュエル『時間と他者』原田佳彦訳、法政大学出版局、一九八六年
(Emmanuel Levinas, *Le temps et l'autre*, 1948)

ロデイス＝レヴィス、ジュヌヴィエーヴ『デカルト伝』飯塚勝久訳、未来社、一九九八
年 (Geneviève Rodis-Lewis, *Descartes, Biographie* (Calmann-Lévi, 1955))

* 本論文は、文部科学省・日本学術振興会科研費 JP17H06336、JP19K21612 の助成に
よる研究成果の一部である。

Voice, Time and Dialectics: Critique of the political economy of memory and imagination, part V

Eiichi NOJIRI

This article is the fifth (Part V) of a series of six to eight parts. Alloying philosophy, psychoanalysis, and cultural studies, this series seeks to articulate a relationship between the essential nature of Western philosophy's metaphysical method of dialectics and the structure of memory in human beings. Covering Western philosophers from ancient to modern, such as Plato, Socrates, Augustine, Descartes, Kant, Heidegger, Hegel, Lacan, Derrida, and Jakobson, and quoting social, cultural, and psychopathological materials such as *Sarashina Diary* (the daughter of Sugawara no Takasue in 11c Japan), *Funes the Memorious* (Jorge Luis Borges), *Norwegian Wood* (Haruki Murakami), *1984* (Apple Computer television commercial), autism spectrum disorder, late capitalism, and even the Quest Atlantis boom, this series endeavors to elucidate the nature of memory in the neurotypical (NT), the so-called normal, most human beings. The so-called normal can be defined only by comparing it with the so-called abnormal. In conclusion, the author elucidates that it is the being of 'the otherness' that always and already permeates the normal and stable working of memory. It is that which frames the structure and content of the ego. In particular, the heteronomous nature of memory and imagination capabilities of typically developed individuals is depicted.

Part I traces the position of imagination from Augustine to Descartes and, Part II, its position in Kant and Heidegger. Part III examines Hegel's theory of imagination with precision. Hegel transforms the Kantian productive imagination into one that makes "sign." Part IV closely examines what "sign" and "mechanical memory" are in Hegel and discusses the enigma of the synchronized function of "sign-making fantasy." In Part V, I work on the riddle of "sign-making fantasy" and discuss the theoretical possibility of a "pseudo-synchronic circuit" that synchronizes our fantasies, using contemporary linguistics and psychology.

Compared with Kant's visual imagination, Hegel's imagination is phonetic. Hegel considered voice to be the medium that connects intuition and language. Voice is a physical existence, but it also has the property of disappearing. The voice of another person enters one's inner self. One's voice can be superimposed on others' voices. Voices can be superimposed on letters and images. Due to its nature as a transparent medium, voice produces a "sign." However, Hegel also states that the negativity of voice, which denies the directness of intuition, is still "abstract negativity." The "concrete negativity" of truth, which transforms linguistic symbols into something internal, is the intellect. However, Hegel does not explain concrete negativity. This "concrete negativity" transforms recollection into memory. It is a component that accompanies speech and a force that enables us to overwrite the voices of others on our own, internalize others' language, and simultaneously retain it within ourselves as an external object. It is the light that could rescue "Funes the Memorious" from the darkness of recollection's fullness and drag him out to the dialogue with others. In Part VI, we will examine the nature of this "concrete negativity" mentioned by Hegel, based on the distinction between metaphor and metonymy in Jakobson's famous paper on two types of aphasia.

Key words: imagination; memory; Hegel; Derrida; sign; voice; concrete negativity